



2018年2月17日(土)11:00

南葵音楽文庫閲覧室(和歌山県立図書館内)

□□□□□□

□□□□□□□□□□

□□□□□□□□ 1-7-38

tel.073-436-9500



はじめに:

特別閲覧室の不思議な楽譜(2)

- 表紙に機関車が…?
- "PACIFIC"とは…?
- "231"とは…?
- 機関車の音楽…?
- 作曲者は誰…?(鉄っちゃん?)

■この楽譜は何か?

なぜ南葵音楽文庫に入っているのか?

1. スナール社の室内楽シリーズ(1/20のミニレクの復習)

- スナール(Senart)はフランスの音楽出版社。
- 室内楽シリーズ
年二回の定期刊行物(要予約)。楽譜のセット+付録の冊子。
買い揃えると室内楽の楽譜の一大コレクションが完成。
1921年にスタート。1927年ころまで続いた?
- 意欲的なラインナップ
A. フランス内外の若手作曲家の作品を紹介 ex. 松山芳野里《5つの日本的な歌》
B. 過去の名作を発掘
- 南葵音楽文庫は、この室内楽シリーズのほぼ全体を購入(経緯は不明)。
■シリーズの全体像が把握できる。
- 室内楽シリーズの5つのカテゴリー
「ピアノ」「ヴァイオリン」「チェロ」「アンサンブル」「歌とピアノ」
- 「不思議な楽譜」は、①「ピアノ」カテゴリー中の一曲。
② スナール社の看板作曲家オネゲルの代表作。

2. オネゲルと《パシフィック 231》

- アルテュール・オネゲル (Arthur Honegger 1892-1955)

スイス国籍、フランスで活躍。フランス六人組の一翼を担う。

5 曲の交響曲や《パシフィック 231》等の管弦楽曲によって知られる。

オラトリオ、バレエ、室内楽曲等にも充実した作品を残す。

ex. 《ダビデ王》《火刑台上のジャンヌ・ダルク》《クリスマス・カンタータ》 etc.

晩年は、第二次大戦、米ソ対立等により、人類と音楽文化の未来を悲観。

Cf. 『私は作曲家である』(音楽評論家ガヴォティとの対談を本にしたもの)

- 《パシフィック 231》

オネゲルの代表作のひとつ。もとは管弦楽曲。スナール社から出版。

「交響的運動(楽章)」Mouvement symphonique 三部作の第 1 番

第 2 番《ラグビー》(1928 年)、第 3 番[タイトルなし](1932 年)。

献呈: エルネスト・アンセルメ (スイスの指揮者で作曲家の友人)

初演: 1924 年 5 月 8 日 セルゲイ・クーセヴィツキー指揮 パリ・オペラ座管弦楽団



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Arthur_Honegger_1921.jpg

▲ オネゲル

私はいつも情熱的に機関車を愛した。私にとって、それは生きものと同じであり、そして他の人々が女たちや馬を愛するように私は機関車を愛した。この《パシフィック》において私が表そうと努めたところは、単に機関車の騒音の模倣ではない。それは可視的な一つの印象と肉体的な一つの愉悦とを音楽的構成によって翻訳しようとしたものである。この曲は、[機関車を]対象として眺めるところから始まる。停止中の機関車の静かな呼吸、発車しようとする努力。ついで、速力が次第に増加し、ついには抒情的な状態——すなわち真夜中に一時間 120 マイルの速力で疾走する 300 トンの汽車の感激——にまで到達する。

(オネゲルが《パシフィック 231》について述べた言葉)

- タイトルの意味: 蒸気機関車の車軸配置
先軸-動輪-後軸の軸数が 2-3-1 のタイプを、フランスでは「231」、アメリカでは「Pacific」と呼ぶ(→「パシフィック社製の機関車」の意味ではない)。したがって、Pacific = 231。そのため、もともとのタイトルは“Pacific (231)”

- 特別閲覧室の楽譜: 《パシフィック 231》のピアノ独奏用編曲。
原曲の管弦楽曲が高く評価される。
→ピアノ独奏用に編曲、「室内楽シリーズ」のピアノ曲編に組み込む(1926年)。

編曲者: アドルフ・ボルシャル(Adolphe Borchard 1882-1967)
フランスの作曲家・ピアニスト。シャンソンや映画音楽を作曲。
サシャ・ギトリ監督の映画『とらんぶ譚』に出演。
被献呈者: アンドレ・ヴォラブール (Andrée Vaurabourg 1894-1980)
フランスのピアニスト。オネゲルと1926年に結婚。



▲ ボルシャル

<http://www.cnk.dk/Liszt%20etudes%20dexecution%20transcendante%20conce>



▲ オネゲル(左)とヴォラブール

<http://www.pipesetbouffardes.com/honnegger/f17.highres.jpeg>

3. 《パシフィック 231》と映画

- 短編映画 『パシフィック 231』 *Pacific 231* (1949年公開)
フランスの映画理論家・評論家ジャン・ミトリ (Jean Mitry 1907-1988)の実験的短編映画。カンヌ国際映画祭で最優秀編集賞を受賞。
オネゲルの管弦楽曲《パシフィック 231》を見事に映像化。

- 映画『鉄路の白薔薇』 *La Roue* (1923 年公開)

アベル・ガンス(Abel Gance 1889-1981)監督の名作。

上映時間三時間余の大作。無声映画。音楽をオネゲルが担当。

*主人公は蒸気機関車の運転手。列車事故で両親を亡くした娘を引き取って育てるうち、この娘を愛するようになり、苦悶。ついには列車を暴走させる。

列車暴走の場面: 加速度的モンタージュ

*フラッシュバックによる極端に短いショットが次第に速いスピードで交互にカットされていく。



オネゲル《パシフィック 231》の作曲技法(列車の加速・減速の表現)に影響を与えた?

ガンス『鉄路の白薔薇』	オネゲル《パシフィック 231》
映写機は同じ速度で回転し続ける。	曲が主部に入る(機関車が走り始める)とテンポはあまり変わらない。
↓	↓
しかし、単位時間当たりのショットの数は増えてゆく。	しかし、単位時間あたりの音符の数は増えてゆく。
↓	↓
そのため、機関車がますます速度を上げるように感じられ、ドラマの緊張感もましてゆく。	そのため、機関車がますます速度を上げるように感じられ、音楽の緊張感もましてゆく。

おわりに: 南葵音楽文庫とその時代

- 機械文明の時代
- 映画の時代
(サイレントからトーキーへ)
- 1920年代の映画音楽

時代の“こだま”としての「機関車の表紙」

.....

○主要参考文献

アルテュール・オネゲル『私は作曲家である』吉田秀和訳、音楽之友社、1970年
 アルテュール・オネゲル『化石への呪文』塚谷晃弘訳、カワイ楽譜、1971年。
 ジャック・フェシヨット『オネゲル』天羽均訳、音楽之友社、1971年。

加藤幹朗『列車映画史特別講義 芸術の条件』岩波書店、2012年。